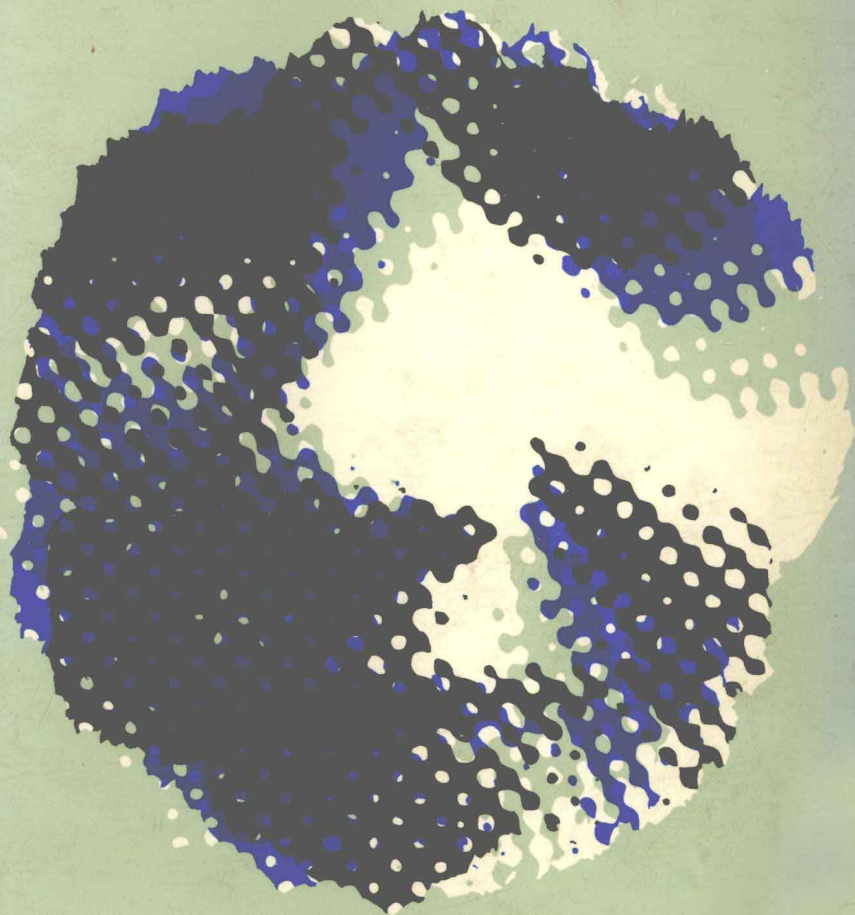


耳に蚤 疑いのとりこ

ジョルジュ・フェドー傑作集—1

米村晰一訳

劇書房



訳者略歴

米村 晰 (よねむらあきら)

1925年5月生まれ。金沢市出身、53年東大仏文卒。劇団四季研究所々長、慶応大学仏文科講師等をつとめ、現在、劇団薔薇座顧問、武蔵野美術大学教授、立正大学講師。ジロドウ「オンディース」「間奏曲」アヌイ「ユリディス」「野性の女」メーテルリンク「青い鳥」など、上演戯曲の翻訳多数。

メソッド演技 (劇書房刊)

耳に蚤——疑いのとりこ

定価 二五〇〇円

昭和五十五年十一月一日 第一刷発行

著者 ジョルジュ・フェドー

訳者 米村 晰

発行人 笹部博司

発行所 劇書房

東京都千代田区神田錦町三十八

寿ビル 七〇二

〒一〇一 電話〇三(二九二)七〇七七

印刷 三秀舎

オフセット 京美印刷

製本 大口製本

用紙 竹尾

発売 株式会社構想社

東京都千代田区神田錦町三ノ八

〒一〇一 電話〇三(二九四)六六六七

耳に蚤 疑いのとりこ

ジョルジュ・フェドー傑作集—1

米村晰一訳

劇書房

目次

旦那さまは狩りにお出かけ.....	5
耳に蚤―疑いのとりこー.....	105
ジョルジュ・フェドー 人と作品.....	238
マルセル・アシャール.....	
訳者あとがき.....	257

装本・カット 安達史人

旦那さまは狩りに出かけ *Monsieur chasse*

喜劇三幕

——パリ初演は、一八九二年四月二十三日 パレー・ロワイヤル劇場——

人物

○デュシヨテル

（モリセ（デュシヨテルの親友、独身の医者）

カサーニユ（デュシヨテルの友人）

ゴントラン（デュシヨテルの甥）

ブリドワ（警部）

警官(1)

警官(2)

○レオンチーヌ（デュシヨテルの妻）

マダム・ラツール（モリセの借りたアパートの管理人、

元伯爵夫人）

バベ（デュシヨテル家の女中）

第一幕

デュシヨテル家の、部屋の隅を斜壁にしてある喫煙室。奥の入口は次の間に通じる。前景上手に暖炉、その上に鏡。暖炉にのせてあるのは飾り物（置時計、枝つき燭台）のほかに、手燭台とマツチ。暖炉の下手に呼鈴の紐。上手斜壁に客間へ通じるドア、そのドアはレオンチヌの部屋にも通じている。前景下手にデュシヨテルの部屋に通じるドア。前景のドアと舞台迫持のあいだに小さな整理机、その脚が一本ちよつと欠けているので、仮綴本をそこにかませてある。整理机の中には筆記用具。舞台中央にかなり大きな楕円形テーブル、その両側に肘かけ椅子一つずつ。テーブルには火薬つめ具と、弾薬いれ、碗が二つ、その一つには鉛玉、他方には薬包とつめ物はいっている。机のそば下手に、折たたみ椅子。上手、暖炉とテーブルのあいだに、クッションつきスツール。奥のドア両側に、渦巻脚の小テーブル一つずつ。その上に花籠がのせてある。小テーブルと斜壁とのあいだに、肘かけ椅子一つ。下手の肘かけ椅子の上に、男の帽子。上手の渦巻脚テーブル

に、ステツキがたてかけてある。暖炉には火。

一場 レオンチヌ、モリセ

幕があがると、二人はテーブルの前にすわっている。レオンチヌは上手、モリセは下手で、薬包をつくっている最中。しばらく間。仕事を続けながら、モリセはレオンチヌに上目づかい、やがて薬包に視線を戻すが、話すのをためらっている様子。ついで意を決して。

モリセ（嘆願調）レオンチヌ！

レオンチヌ（手に持った薬包の中に装薬をつめながら、首を横に振る）だめ！ 火薬をつめましょう！（薬包をモリセに渡す。モリセの同じ嘆願、ついで）

モリセ お願いです！

レオンチヌ だめ！ ほら…（薬包を指して）つめてちょうだい！

モリセ（つめ具でつめながら）つめますよ！…ねえ！

どうってことないでしょ、レオンチヌ！

レオンチヌ（我慢しきれなくて）なによ！（はつき

りと) だめ、だめ、だめ!...おわかり?

モリセ (ぶりぶりして、立ちあがる) あー、いいですよ! ふたりの愛の最初の証しを求めただけなのに:

レオンチーヌ (すわったまま、からかうように) 最初の証し? あなたが始めたのは最後からでしょう。

モリセ (さげすむ) ああ、そんな順番にこだわるんですか? (まるで自分の当然の権利であるかのように) ぼくが求めているのは、ごく自然なことだ: 仲のいい人間なら: ご主人は狩りにお出かけ: ぼくは親友。つきあってくださいとお願ひしたって、なんでもないでしょう、たったひと晩ぐらい。

レオンチーヌ (冷笑的) あしたの朝まででしよ。

モリセ (確信にあふれ) あしたの朝早くまで! 八時には仕事にかからなきゃなりませんからね。

レオンチーヌ (冷笑的) まあ、ずいぶん自分勝手ね。

モリセ (つんとして) レオンチーヌ、あなたはぼくを信じてないんだ。

レオンチーヌ だってむちゃよ。たとえあたしにその気があったとしても: ひとの噂ってものがあります。あなたはそれをまるつきり考えてくださらない。今晚あたしが家をあげたら、召使たちがなんて言うと思うの? しゃべりたくてうずうずしてる人たちのよ!

モリセ (軽蔑をこめて) つまらないことを問題にするんだな。(すわり直して) 奴らをだますことぐらい、訳ないでしょう、女なら:

レオンチーヌ そりゃ訳ないわ! (薬包をモリセに渡して) 二十九。

モリセ (薬包をとって、つめながら) 二十九。田舎に親戚のひとりやふたり、おありでしょう?

レオンチーヌ ええ、おばがいるわ:

モリセ じゃ、ご主人が留守なので、おばさんのところへ行ってくるって:

レオンチーヌ そう、そしてそれから横道へそれて、アテネ街四〇番地、ムッスユ・モリセのアパートにお寄りするわけね。

モリセ (大まじめに) そう、そう!

レオンチーヌ (冷笑的) つまり、あたしは独身のあなたのお部屋にはいって行く。

モリセ (確信をもって) そのとおり!

レオンチーヌ (冷笑的なままで) あきれた:

モリセ (反論の余地のない論拠のように) おかしいなあ: すぐ近くじゃないですか、よくご存知でしょ。

レオンチーヌ ごりっぱな理由ね。

モリセ (辛辣に) どうして? あの小さな部屋を借りる

については、あなたにこっそり相談したでしよ、ご主人には内証にして。どのアパートにしようか迷ってるってぼくが言うと、あなた、おっしゃったじゃありませんか、「これになさい、近いから」って。(情熱をこめて)あの言葉を聞いて、ぼくはすぐに賃貸契約を結んだんだ。あらゆる障害をのり越えて！あの部屋にはユルベーン・デ・ヴォワチュールという女性がいたんです。部屋代の払いがときたま遅れるという、ただそれだけの理由で、ぼくはその女を追ひ出してもらった。うしろめたい気がしたけど、それもみんな、あなたがおっしゃったからですよ、「これになさい、近いから」って…

レオンチーヌ それは言いがかりというもののよ。

モリセ (辛辣に) ふたりの性格の違いかな。「これになさい、近いから」…あのお言葉によって、ぼくには万事よくのみこめたつもりでしたがね。

レオンチーヌ まあ、あたしのこと、どう思ってたっしやるの？ 男の方の部屋へ平気で出入りする女とでも…

モリセ (抗議の叫び) そんなこと夢にも！…とんでもない！

レオンチーヌ (薬包を渡して) 三十。

モリセ (薬包を受けとって機械的にくり返す) 三十…あなたをお慕いしてるこのぼくが、そんなばかなことを考

えるはずないでしょう！ ぼくはただ、「ぼくの家へ来てください」って言うてるだけです。ぼくの部屋ですからね…しかもふたりだけの秘密です！ もしあなたがそんなだいそれたことのできる方だと思ったら…あなたをどんな目にあわせることになるのかな？

レオンチーヌ どちらにしても結果は同じよ。

モリセ いや、微妙な違いがあるんだ！

レオンチーヌ そんな微妙な違いなんか、どうでもいいわ！ ね、もうそんな話、よしませう…さあ、もうよしませう。

モリセ (立ちあがって舞台を大股に歩き回る) わかりましたよ！…もう二度と口にしない。ただひとつ、あなたに打ち明けてしまったことだけは悔しいな。

レオンチーヌ さ、お気持ちは胸にしまって、火薬をつめましょう。

モリセ (陰にこもった怒り) まったく女ってやつは、これだからな。

レオンチーヌ (薬包を指して) おやめになるの？

モリセ (怒りのまま) ええ、やめますとも…まったく度しがない…

レオンチーヌ 火薬のことよ。

モリセ (皮肉なうす笑い) ああ、なるほど、火薬ね！

なおさらやめますよ、火薬なんて……（怒りを抑えて）
奥さん、もうたくさんですよ、ご主人のために火薬をつ
めるなんて、つまらぬ仕事は！ ぼくはあなたを高くあ
がめたのに……なんだか地べたへどすんとつき落された
ような気持ちだ……（確信をもって）もうどうでもいいけ
ど……おかげで、はだかのあなたを見ることができました
からね。

レオンチーヌ（叫ぶ）ええっ？

モリセ（すわり直して）噓えて言っただけですよ。

レオンチーヌ よかった！

前景下手から、デュシヨテル登場。

二場 レオンチーヌ、モリセ、デュシヨテル

デュシヨテル（銃銃を持って、その手入れ。二人のあい
だに来て、テーブルのうしろ、客席に向かって立つ）ど
う、うまくいってる？

モリセ（むっつりして）だめ！

デュシヨテルへえ？ 何が具合悪いんだい？

モリセ（むっつりしたまま）なにもかも。

レオンチーヌ そんなことないわ！

モリセ ええ、あなたはそうでしょうけど、ぼくみたいな
燃えるたちの人間にとつては、いくら努力してもはかど
らない、なんてのはね……

デュシヨテル まあまあ……きみはせっかちすぎるんだよ……
我慢してくれよ！ お駄賃も出ないんだから……（下手前
へ出る）

モリセ そう、お駄賃だって、手間隙だって……みんなだめ
……みんなバア！

デュシヨテル（無邪気に）ぼくも手伝おうか。

モリセ（あわてて）いや、かえって迷惑だ。

デュシヨテル ぼくもそう思ったんだ。「レオンチーヌも
いるし、ぼくのいないほうが、かえってはおかどるだろう」
ってね。

モリセ もちろんだ！

デュシヨテル（元気づけようとして）じゃ、もうすこし
頑張って……

モリセ（本音を吐く）お人よしだね、きみは！ （レオ
ンチーヌに）いい人ですね。

デュシヨテル そうさ、こんなつまらん仕事で、そんなに
気分を悪くするなんておかしいよ！ このぼくをすこし
見習ったらどうだ。平気な顔してるだろ。じつは銃の手

入れがうまくいなくて困ってるんだがね。

モリセ 手入れの仕方をよく知らないからだろう。

デュシヨテル じゃあ、きみは知ってるのかい？

モリセ おやおや…

デュシヨテル もしきみだったらどうする？

モリセ (單純に) 銃砲店へもってくよ。

デュシヨテル (お辭儀をして) おそれいました…

レオンチーヌ さ、これで三十二… (立ちあがって、下手

奥の家具の上の薬包ベルトをとりに行く)

モリセ (立ちあがって) よく狩りなんか好きになれる

ね！

レオンチーヌ ほんと！

モリセ (上手前へ) 動物の苦しむのを見るなんて！…あ

あ、いやだ！ ぼくだったら、人間でさえご免だ！

デュシヨテル それが医者言草か！

モリセ (とりあおうとしないで) で、その大殺戮をやり

に行くのは、例の友だち、カサーニユの所かい？

デュシヨテル (いきいきと) そう、いつもね。

モリセ それにしちゃ、この家に現れないね、ムツス。

カサーニユは。

レオンチーヌ (下手前へ) そうね？ (椅子にかかっている

仕事袋から毛糸のかせをとり出し、巻きとりはじめる)

デュシヨテル (何も知らぬふり) 田舎から動こうとしな

いんだよ、あいつは！

モリセ そうそう、夫婦生活の破綻を忘れたらダメって？

デュシヨテル “破綻” たって、細君と別居してるだけだ

よ。

モリセ ああ、でも、細君に裏切られたんだろう。

デュシヨテル その証拠がないのさ。

モリセ 証拠があつたところで同じだよ。いや、これは悪

口じゃない。きつと、ふたりは性格が違いすぎるのさ。

(わざとレオンチーヌに) マダム・カサーニユは、一人

前の女として、少なくとも恋人をひとり持っただけだね。

(レオンチーヌは視線をそらし、わからないふり)

デュシヨテル (訳がわからないらしくモリセをにらむ)

どうして「少なくとも恋人をひとり」なんて言い方をす

るんだい。「ほんとは大勢いるんだ」って、あてこすつ

てるみたいだぜ。

モリセ (差し出口をはさんだ者に答えるように、ぶつく

さと) 違うよ！「少なくとも彼女は」のつもりで言った

んで、「恋人を少なくともひとり」って意味で言ったん

じゃないよ。きみの聞き方が悪いんだ。

デュシヨテル つまり、きみの言い方の細かなニュアンス

が把握できなかったってわけか。

モリセ (ぶつくさと) そんなこと、どうでもいいけど

ね!

デュシヨテル (主張をくり返す) おめでたい奴だな。「恋人をひとり」なんて言うけど、なんか知ってるのかい? レオンチーヌ 何かご存知?

デュシヨテル (いきりたつて) 亭主がそう言ったからかい?…でも奴に何がわかる?…第一こんなことになる、いつだって知らぬは亭主ばかりなり…臆測だけで証拠なし…カサーニユが悩んでるのも、その証拠がないってことさ。そのために別居を離婚に切り換えられないんだ。双方の合意が必要だろ…ところが細君は離婚の意志なしなんだぜ…

レオンチーヌ むりないわ。彼女、善良なカトリック信者でしようし。

デュシヨテル (同意して) そう…おまけに生活費ももらえなくなるし。

モリセ 欲得づくの信者だな。

デュシヨテル (銃の手入れを続けながら) このくそ鉄砲! きみの忠告に従って、銃砲店へもって行こう。(奥のほうへ行く) おい、バベ…(奥から退場)

三場 モリセ、レオンチーヌ

しばらく間。レオンチーヌはテーブルの下手へ来てすわり、毛糸と刺繡の布を袋にしまふ。モリセは縦横に歩き回る。

モリセ (間のあと、自分の固定観念に戻って) じゃあ、よくわかりました…。もういちど念を押しますが、どうしてもいやなんですわね?

レオンチーヌ (うんざりした溜息まじり) まあ! まだ言ってらっしゃるの!…

モリセ (下手へ行き) いや、いいです! でもあなただって、ぼくを愛していることを打ち明けるべきだ…。(レオンチーヌは沈黙。彼は奥へ行き、ついでテーブルのうしろに戻ってくる。客席に向いて) いまさら言わなかったとは言わせませんよ…。(陰気に) あなたの飼ってたオウム、覚えてますか? 死にましたね、かわいそうに…(涙声になって) かわいなおしゃべりをしながら、「プランデーちようだい、ばか、ばか、ばか!…」って。あのオウムが息をひきとったとき、われわれは三人きりだった…あなたとオウムとぼくと…(レオンチーヌの深い溜息) ご主人は留守で。(情をこめて) 覚えてますか、あな

たは涙にくれていた……ぼくは、あなたを慰めた……あなたはぼくの胸もとで泣いた……ああ、あの涙……！……ぼくはあなたをこの腕に抱きしめた……しつかりと……いつか自分が何をしてるのか、わからなくなつた……ぼくの涙とあなたの涙が入りまじつて……（ふだんの声で）オウムはスツールのせといた……（抒情的に）あの時だ、いつわりのない心の衝動に駆られて、あなたが思わずもらしたあの言葉、「愛してるわ」……あれがすべての原因なんだ！……ぼくは有頂天になった！……そこへご主人がはいって来た……ぼくはすかさずオウムをつかんで、やつとのことで落ち着きをとり返した。それから三人でオウムのために涙を流し続けた……ああ、言わなかったとは言わせませんよ、「愛してるわ」、あれがすべての原因なんだ！

レオンチヌ とり乱した時には、何を口走るかわからないものだわ。

モリセ （はつきりと）いいえ！……あの時あなたはまじめだった。誓つてもいい……女性はとり乱して我を忘れてる瞬間にこそ、本音を吐くものだ。

レオンチヌ それじゃあ、「愛してるわ」って口走つたら、なにもかもそこに含まれることになりますの？……だって、その言葉から何を想像なさつたのか、あたしにはわからないのに！（立ちあがる）

モリセ （大まじめでごく自然に）「愛してる」という言葉から、男が想像することすべてです。

レオンチヌ （憤慨して）まあ！

モリセ つまり無言の契約です。それは名譽を重んじる人間のあいだでは、約束手形と同じ価値を持つてゐる。支払い期限はきまつてないけど、いつかは支払わなければならない……手形と同じなんです。違ふのは、ただ第三者に渡せないってことだけ。

レオンチヌ よかつた！

モリセ ああ、「愛してる」って、口で言うのはやさしい。でもそれを実行で証明しなくちゃ……ぼくのほうは証明する用意はとくにできて……さあ、あなたも覺悟をきめてください、覺悟を。

レオンチヌ （からかうような様子で、しばらく彼を見つめ、ついで上手へ行く）あたしは支払いをお断わりします。

モリセ それは破産宣告だ！……手形さぎになりますよ！

（この場はすべて最初から、モリセの絶対の確信と最大の熱情をもって演じられなければならない。滑稽さは、まじめさのなかにこそあるのだから）

レオンチーヌ (テーブルへ行き上手の肘かけ椅子にすわる) しょうのない方。あたしたちのあいだには誤解があるわ!...あたしが「愛してる」って言ったって、あなたは言い張ってらっしゃる。その言葉は信じてさしあげた
いし、否定はしません。

モリセ (意気揚々と) それじゃあ!

レオンチーヌ だって...あたしにも選ぶ権利ぐらいあって
もいいでしょう? とにかく、あなたはひとに嫌われる
方じゃない...あたしのまわりでは誰よりもいい方よ。

モリセ (素朴にうぬぼれて) いまここにるのはぼくだ
け。

レオンチーヌ (からかう、いとも軽やかに) だからだわ、
きつと... (またまじめになつて) あなたは女性に親切だ
し、詩もおつくりになる。お医者さまにはうってつけ。

それに女はみんな詩には弱くて心を動かされるものです
わ...

モリセ (テーブルにすわって、みせかけの謙遜) おほめ
いただいて恐縮です... (さり気ない様子だが、うぬぼれ
が垣間みえる) ぼくの最新作の詩集『心の涙』、お読み
くださいましたか?

レオンチーヌ (口調を変えて) いえ、まだですの、主人
が読むつとりあげてしまつて... (初めの口調に戻つて)

ですからあたしの心がごくふつうの人たちよりも、ずつ
と大きな影響をあなたから受けたとしても、ふしぎじゃ
ないでしょう? 心っていろんな愛情を受けいれる余地
があるのですわ...。ひとりの人に与える分と、ほかの
人に与える分とが、ぶつかりあわないぐらい、心は広い
ものですわ... (立ちあがつて、きっぱりと) でも、女は
自分の心を自由にできるけど、人妻はそうはいかないわ。
妻は夫だけのもの。(上手前へ)

モリセ (せせら笑いを浮べて) あ! 夫ね!

レオンチーヌ (彼のほうへ戻つて、大まじめに) 悪口言
う気? 親友じゃないの!

モリセ (立ちあがつて) 親友ですとも! しかもあなた
よりずつとましだ! ぼくを信頼してくれますからね、
彼は...

レオンチーヌ (首を縦に振つて、意味ありげに唇を歪め
て) それなのに、その友情のお返しがこれ?

モリセ (確信をもつて) とんでもない、ぼくは彼を愛し
てる...もちろんあなたも愛してる...愛してますよ、いい
人ですからね!

レオンチーヌ (前のまま) それでいて、あたしがあの人
を裏切つてもいいつておっしゃるの?

モリセ (どぎまぎして) えっ!...それは...ちよつと見方

が違ふ。

レオンチヌ (はつきりと) ねえ、モリセ、夫婦は結婚すれば、互いに貞節を誓うものでしょ……

モリセ (ひやかす) 神父さまがそう要求しますからね。

レオンチヌ (前のまま) こんどは神父さまの悪口？ あたしは、夫が誓いを守ってるかぎりには、自分の誓いも破りません。

モリセ (前のまま) 「男のほうから、お先にどうぞ」って考え方ですね。

レオンチヌ そう！ もしあすにでも、主人があたしを裏切ったり、浮気の証拠があがったりしたら、あたしのほうから、あなたにお願いするわ、「モリセ、この仇をとって」って！

モリセ (有頂天になつて) ほんとう？ ああレオンチヌ！

レオンチヌ (出鼻をくじく) でも……どうせそんなこと、ありえない仮定のお話よ。(暖炉のほうへ行く)

モリセ ああ！ なるほど……(テーブルにもたれ、客席に向いて) ご主人の趣味はなんでしたっけ？ ポートにハンティング……スポーツとしてはまあそんなものでしょう……

レオンチヌ (炉^ろ辺で) そうね……

モリセ (腹黒く) それも狩りのための狩りだ。世間にはハンティングが好きなふりをする夫が大勢いますからね……じつは大違い……ガール・ハントに出かけるための手段なんです……「狩りに行ってくる」は、うわべの口実、いったん外へ出れば、しめたもの！

レオンチヌ そうそう！ でもあの人は別よ。モリセ そう別です！ じつはぼく、疑ってみたことがあるんだ！「ひよっとすると、デュシヨテルの奴……」って

ね。もちろん見当違い……狩りから帰って来た時の彼の顔、晴晴してますからね、まさに良心に一点の曇りもない証拠だ。

レオンチヌ でしょう？

モリセ でもねえ……やたらに獲物が多いので、こう思ったこともありますよ、「デュシヨテルは何かやましいことがあるからこそ、こんなに大ぼらを吹いてみせるんじゃないかならうか」って。

レオンチヌ (彼のほうへ行つて) まあ？ なあに？ 何をおっしゃりたいの？

モリセ (テーブルから離れて) いや、べつに何も知らないんです。でもたとえば、このあいだ、獲物として、野ウサギと穴ウサギを持って帰って来ましたね。

レオンチヌ それで？